

Account of the Life and Writings of Adam Smith LL. D.

法学博士 アダム・スミスの生涯と諸著作 についての説話

エディンバラ王立学会会報から

「ステュワート (Stewart) 氏による、一七九三年の一月二日および三月一八日の講説」

武 田 正 二

第四節 「諸国民の富の本質と諸原因にかんする研究」について (続)

この回想のもつ諸制約のため、わたくしは、独創性という点におけるスミス氏の労作の真価を、詳細に検討することができない。交易ならびに産業の自由にかんする彼の理説が、われわれがフランス・エコノミストたちの諸著作のうちに見出す理説といちぢるしく照応していることは、彼自身が与えてしまっている彼らの体系についてのわずかな観点からしても、はっきりしている。しかし、かの体系の数多い解説者たちのうちの誰か一人でもが、スミス氏がかの体系を論述していたさいの適確さと明快さにおいて、あるいはスミス氏がかの体系を基本的諸原理から演繹してい

たさいの学問的で鮮明な方法において、そのスミス氏に近似していたことがあるということは、かの体系の最も熱烈な賛美者たちによっても、確かに主張することのできないことである。彼らの採択している技術的用語のぎこちなさ、および彼らが彼らの諸見解のうちの幾つかを提示するために選択しているさいの逆説的形式は、最も進んで彼らのもつ諸眞価を正當に評価しようしている人たちによってさえ、容認されている。ところで、数理的で物理的な諸学問の領域を超えて、その整合性において、一種健全な論理学の諸法則に実によく適合すると同時に、普通の読者たちの検討にも実に容易に応じうるような、何らかの書物がもしも現に存在するとするなら、スミス氏の『研究』にかんしても、疑惑を抱いてよいかもしれない。作者の独自の独創的な諸思索を全然捨象するにしても、どのような主題にかんしてであれ、その時代の至極深遠で啓蒙された哲学についての実に方法的で実に包擁的でまた実に分別にも富む一つの集成を内容とするある労作が、われわれの諸時代の中に生みだされたことがあるということを、わたくしは知らないのである。^①

① 本文において、わたくしは、スミス氏の整合性にかんして、その任ではない賛辞を呈しておいたにもかかわらず、なおわたくしは彼の付随的な論議や余論のうちの幾つかが彼の一般の構想とヨリ好妙にかつ適切に合体化されてもいたであらうことを、容易に認めるものである。けれども、彼のプランが包含するような多面的で、しかも一見したところでは、関連性ももっていないような諸探索に、一種の体系的形態にも似たものを何か与えることのきわめて難事であることを承知している人々によれば、この種の諸欠陥には、ほとんど力点が置かれていないであらう。なぜなら、それらの探索のうちの幾つかは、抽象的な諸原理を普遍的に適用しうるまでに確立することを、その狙いにもっているからであり、また他のものは、われわれ自身の祖国の事情や政策にかんする一種特別な論及を、荷っているからである。——なおまた、記憶しておかなければならないことではあるが、整合性にかんする諸問題では、われわれの趣向は、われわれ個々人の思考上の諸習性によっても、われわれの早期の学的諸研究にか

かわる偶発的な行動によっても、また同一の諸対象を、いろいろな実証的研究者たちのために、さまざまな側面の下に提示するように期待してもよい他の事情によっても、大変に影響を受けやすくなるものである。この種のことは、もっと厳密な諸学問においてさえ、何かしら経験されているのである、というのも、そういう諸学問においては、基本を追う一廉の著作者の全業務というものも、既知の論証ずみの諸真理を、論理的で快適な一連の系列を追って論述することにあるからである。それは、理論幾何学において最も顕著に経験されているのであって、その諸定理は、近代ヨーロッパの一流の数学者たちによって、凡百の異なる数式にまで標型化されているのである。ところが、それらの数学者のうちの誰一人もが、未だに、公衆のもっているものろの参政権を、文句なしに最善のものとして、何か一つの整合性に都合よいように、統合することができないのである。それなら、ある広大な未踏の分野にあえて挑戦しては、鮮明な方法への一つの体系的な配慮を、独創的な思索の課題と結びつきたいものだと思望している人たちは、どのような諸承認を受ける資格があるのか、たとえそのような人たちが、自分たち自身の諸結論のもつ史実に基く秩序を、人間悟性の自然的な順序と時にたまたま誤ることがあるであろうにしても！

またスミス氏を公平に判断するにさいしては、述べておかなければならないことはあるが、経済学上の著作家たちのうちのある人たちは、自分たちの諸理説を世に公けにするさいには、その出発点を、彼にもついていたけれども、これらの理説も、彼にかんしては、全く独創的であったこと、つまり彼自身の諸省察の結果であったことははっきりしている。このことについては、わたくしも思うのだが、『研究』を当然の注意力をはらって読み、しかも作者の諸思想のもつ漸進的で美しくもある進歩の跡を検討する労を惜まない人なら誰でも確信を抱いているにちがいないが、しかし、この点にかんしても何らかの疑惑が依然として残るであろう際には、言及しておくことも適切なことであろうが、スミス氏の、その『研究』の基本的諸原理を包括している政治学講義は、グラスゴウで、すでに早くも一七五二年ないし一七五三年に、行なわれていたのである。この年次は、確かに、彼の諸探索を導いてくれることでは、彼

にとつても大變に有益でありえたところの、本主題にかんするいかなるフランス人の業績も存在していなかった一時期なのである。^①なるほど、一七五六年には、(通商上の無制限な自由にかんするその最初の諸思考を、老商人のグー
ルネ氏 M. Gournay から摂取していたと言われている) チュルゴー氏が『百科全書』のうちに、通商上の諸規正にとつて有利な旧来の諸偏見から、彼の心が、どのようにして完全に解放されるにいたったかを、十分に示す一項目を、公表していた。だが、その当時でさえ、これらの見解がフランスの二、三の思索的な人に限られていたことは、『チュルゴー氏の生涯と諸著作にかんする回想録』(*the Memoires sur la Vie et les Ouvrages de M. Turgot*) のうちの一
章節からしても、はっきりしている。というのも、この回想録のなかで、只今言及した項目からのある簡潔な引用の後で、作者は次のように付言しているからである。すなわち、「これらの考いは、その当時には、逆説的に考えられていた。これらの考いは、それ以来、共通的になつてしまつてゐる、だから、これらの考えは、何時の日にか、普遍的に採択されるであらう」と。

① これについての証明では、わたくしは、浩瀚な『市民の暦表』(*Ephémérides du Citoyen*) のうちの一巻中に発表されたフランス政治経済学発達小史に訴えることで、十分である。一七六九年の巻数の第一部を、参照されたい。その論文の表題は次のようになっている。『フランスにおいて政治経済学を形成するのに貢献してきた近近の異なる語文獻にかんする要約の略述』(*Notice abrégée des différens Ecrits modernes, qui ont concouru en France à former la science de l'Economie Politique*)

ヒューム氏の『政治論集』(*the Political Discourses*) は、スミス氏にとっては、彼の講義の前に出ていた他のいかなる書物よりも、明らかに大變有益なものであった。けれども、ヒューム氏の諸理論でさえが、つねにまことしやかに

創意にも富み、また大低の場合には深遠で妥当でもあるけれど、幾つかの基本的な誤りを伴っている。だから、スミスの諸理論と比較される時には、一つの顯著な論拠を提供してくれるのではあるが、実に広範にわたる実に錯雑してもいる一つの主題を考察するにさいしては、最も透察力に富む聡明さでさいが、もし特定の諸疑問にのみさし向けられるなら、最初の諸現象によって迷路に引き入れられやすくなるものである、だから、われわれの諸推論が用いられるにあたっての諸概念の厳密で忍耐づよくもある分析に援けられた論議分野全体についての一つの概括的な見通し以外には、いかなる能力といえども、われわれを、誤謬から有効に守ってくれることはできないのである。

——なお、付言しておくことは価値のあることであろうが、ヒューム氏の試論である『交易上の嫉妬にかんして』(On the Jealousy of Trade) は、彼の『政治論集』のうちの幾つかの他の試論とともに、チュルギー氏がそれらの試論をフランス語に翻譯する仕事を企画するにいたったことによっても、そのチュルギー氏の是認するところであったというまことに嬉しい証明を得ていたことになるものではある。^①

- ① 「政治経済学上の多様な諸要点にかんするアダム・スミスの獨創性にかんしては、わたくしは、一般的には、この版(訳者注一八五四—一六〇年版、ステュワート全集一巻)の第八巻および第九巻を参考にするであろう、というのも、この両巻には、斯学にかんするステュワート氏の『講義録』が含まれているから。なおまた、第九巻学芸論においては、索引のアダム・スミスその他を参照されたい。」

この回想が最初に書かれたときには、わたくしは、フランス・エコノミストたちが、その最も重要な諸結論のうちの幾つかに
おいても、はるかに早期の一年代の(主としてブリテンの)著作家たちにより、どの範圍にまで予想されていたかを、十分に承
知していなかった。実際には、わたくしは、エコノミストたちの地域税のもつ諸利点にかんするその諸推論と、六〇年前に公刊

されたその『政治論集』(*Political Discourses*)のうちの一論における同じ問題にかんするロック氏の諸思索との間にある、同時発生性というものにかんしては、もろもろの都市自治体や独占会社にたいするエコノミストたちの反証と、それよりもなお早期の一時代に、一七世紀の後半に現われたかの有名なジョン・ド・ウィット(*John de Witt*)により、ジョサイア・チャイルド卿(*Sir Josiah Child*)により、また他の多彩な思索者たちによつても勧告されていた要旨との、同時発生性にかんしてと同様に、しばしば感心させられてもいたのであつた。わたくしの注意力は、一七六九年に印刷された、そのまことに立派な『フランスの東印度会社にかんする回想』(*Memoir on the East India Company of France*)におけるモルレ神父の幾つかの引用文や参照文によつて、これら一番後の組の著作家たちにこそ、さし向けられていたのであつた。けれども、同神父の方法のうちに集載されていた諸章節よりもはるかに十全で明確な多くの章節が、ロオダーデル伯爵(*The Earl of Lauderdale*)により、政治経済学に関係のある稀少なイギリスの小冊子類についての同伯の好奇心をそそる貴重な収集において、わたくしのために指摘されているのである。これらの小冊子のうちの幾つかにおいては、その論証が、実に明快で実に断定的な一つの仕方で、述べられているのであるが、その仕方は、公衆が実に長い間にわたつて所有するにいたつた諸真理も、現代の哲学的な諸理論のうちに復活されると、大部分の読者には、斬新と逆説の様相を呈してくれるはずであるほどにまで、偏見や虚説によつて完全に威圧されてしまつていたのであることに、びっくりさせられるはずのものである*。

* この島国の著作家たちが、商業にかんする啓蒙的諸思想を採択するにさいしては、それらの小冊子類の出発点を、ヨーロッパの比較的大部分にもつていたであらうことは、われわれが、「イングランドのコモン・ローに従えば、交易の自由は臣民の生得権である」ことを、考察してみるとときには、驚くにあたらないであらう。この点にかんするコーク卿(*Lord Coke*)ならびに最高裁判所長官フォースキュウ卿(*Lord Chief-Justice Fortescue*)の諸見解のためには、(一八〇五年に印刷された)『グリート・ブリテンその他の製造業者たちのための指針集』(*Hints to the Manufacturers of Great Britain*)という表題のついた、ロオダーデル卿による一パンフレットを参照されたいが、そのパンフレットにはまた、右の原理にかんする諸承認と諸宣言とを内容とする諸法令についての一覽表が、見出されるであらう。

いろいろな国民の間の商業交通を規制すると公言する、だから、スミス氏が商業主義または重商主義の名称で識別していた政

治經濟上の体制は、同一の共同体の構成員間において、商工業の自由を抑制していた諸偏見よりも、さらに根深い諸偏見のうちに、その根源を、もっていた。それは、すべての革新が戦わなければならない諸偏見、およびその体制を擁護することに関心をよせていた人々から成るきわめて有力な諸団体の才人たちによってばかりでなく、多くの善良な市民の誤った騒々しい愛国心、および海外のもろもろの仮想敵国や仮想競争国にたいする市民たちの盲目的な敵愾心によっても、支持されていた。また、以前には実に広く行きわたっていた、国民の富の本質にかんしての、つまり一種有利な貿易收支のもつ必要不可欠な重要性にかんしての、不合理で欺瞞的な諸原則（今では、スミス氏の諸論証によって、実に明快にかつ判然と論破されているけれども、商業理論というものにかんして精神が思索しはじめるときには、その精神のもつ最初の不安とともに、自然に、しかもほとんど不可避免的に、落ち込んでゆくのが認められるにちがいない諸原則）は、重商主義のために、ある程度のもつともらしさを、伝えてくれもしていた、というのも、われわれ自身の諸時代の最も賢い理性人たちでさいが、そのもつともらしさに反対して、自分たちの立場を擁護するのにかならずしも十分ではなかったからである。したがって、かなり後の時代においては、その重商主義の諸準則のもつ知恵が、一般的な論議の主題となるようになった。しかし、今日においてさえ、その論議が引き起すにいたった論争内容は、すべての党派の満足のゆくまでに完全に解決されているとは言われえないのである。けれども、ヨーロッパのいろいろな地方の啓蒙された二、三の個人は、その真理をかすかに見届けていた、しかししてそれは正義にほかならないのではあるが、それらの人が叫ぶにいたった散見の諸指針は、学芸史のための諸資料としても、秘蔵されるべきである。わたくしは、ときおり、その主題にかんするちょっとした素描を試みることを、考えてもみた、しかし、このような示唆が、ヨリ有能なある人の手に、その仕事を委ねるといふ好果をもつかもしれない諸希望を捨ててはいないものである。今ここでは、わたくしは、一七三四年に、ジェイコブ・ヴァンダーリント (Jacob Vanderlint) によって公けにされた一パンフレットから、一、二のパラグラフを引用するだけにしておこう。この作者は、その名が近年になってしばしば言及されていることもあるが、その書物が『諸國民の富』の公刊後も長い間にわたって決して多大の注目をひくことがなかったようにおもわれるところの人である。彼は、彼の序文において、自分自身を、一介の普通の商人で、その人柄からしても、一廉の学究のもつ簡潔さと精密さは期待されないはずである、と述べている。それでも、次の諸章節は、良識と寛容との双方の点において、ヒューム氏によって、二〇年後に、その『交易上の嫉妬にかんする試論』で実に巧みに力説されている内容との、ある種の比較には堪えるものであらう。

* チャーバリのハーバート卿 (Lord Herbert) によれば、次の理説は、ほとんど三世紀以前に、イングランド下院で、(その時の演説者) トマス・モア卿 (Sir Thomas More) によって、陳述されていた。「わたくしは確信をもって申し上げるのですが、諸君は、貨幣のこのような欠乏または不足を、恐れる必要はありません。と申しますのも、諸物の交流というものは、全世界を通じて確立されるものでありまして、人類に必要でありうるすべての物財については、ある不断の伝来があるものであります。そうであればこそ諸君の諸商品も、貨幣を、つねに見出すであります。ところで、遠くに行くことがありませんでも、わたくしは、わたくしたち自身の商人たちだけは、産み出すでしょう、なぜと申しますなら(わたくしは諸君に保証いたしますが) わたくしたち自身の商人たちならば、それらの商人が諸君のところに舶来してくれるどのような物財をも、諸君が歓迎することができると同様、諸君の穀物や家畜をも、つねに歓迎するであります。——『国王ヘンリー八世の生涯と治世』(The Life and Reign of King Henry the Eighth)、ロンドン、一六七二年、一三五頁。

省察してみれば少なからず沮喪させることではあるが、この偉人によって、この場合に反論されていた商人的偏見というのは、一八世紀のすべての哲学的な光にも、未だ、全然点じていないのである。

** 『貨幣万能論その他その他』(Money Answers all Things, &c. &c.)、ロンドン、一七三四年

「すべての国民は、その国にとって特産の幾つかの商品を、もっている、そしてそれゆえに、それらの商品は、疑いもなく、数種の国民の間の通商の基礎ともなるように企画されているし、また、そのような諸特産物がなければ多分ありえないであろう数多くの海運業を、人類のために、生みだしている。だから、この点においても、わたくしは想像するのだが、われわれは、他の諸国民と同様に、傑出しているのである。しかしわたくしは以前にも注目しておいたのではあるが、もしも一国民が、本来この点において、他の国民よりも傑出しているとするなら、その国民たちは、その方策によって、そのような他の国民たち以上の貨幣を、取得するであろうから、そこで、その国民たちのすべての商品と労働の価格は、そのような割合で、ヨリ高くなるであろう、そして結果的には、その国民たちは、その国民たちの隣国民たち以上の貨幣を保有するために、ヨリ金持ちになることもヨリ権力的になることもないであろう。」

「しかしながら、もしわれわれが、何らかの種類の財貨を、今われわれがそれらの財貨を調達することができるよりも低廉に輸入するとするならば——そうでなければ、それらの財貨も、同じように国内で調達されるであろうから——この場合には、疑いも

なく、われわれは、そのような諸商品を調達するように試みるべきであり、またそれによって、実に多くの新部門の職務と交易とを、われわれ自身の国民のために提供して、われわれが、どのようにもして、自らに好条件で調達することができいかなる財貨をも海外から受け入れることの不便さを、取り除いてゆくべきである。だから、このことは、そのようないかなる商品ものためのそれぞれの国民とわれわれとの損益計算を、それぞれの国民に見出せないようにするために、行なわれるべきであるからして、このことは、すべてのそのような外国品を、どのような法もが為しうるよりも有効に、閉め出してくれもするであろう。」

「しかしして、このことは、いかなる外国貿易もが妨害されるにさいしてのすべての禁止策や抑制策でもあるとして、この方法が遵守されつづけるにしても、われわれのジェントリは、他の諸国民の諸特産物であるためにどうしてもわれわれが輸入しなければならぬであろうような他の外国品類を、自ら消費するにかかわらず、自分たちがヨリ金持ちであることを、知るであろう。なぜなら、われわれが国内で調達することのできる財貨をすべてこのようにして調達してしまっているときに、このようなことが行なわれてしまった以後にわれわれの輸入する財貨が、われわれがそのような財貨を自分たちで調達することができさいよりもなお低廉であるとするなら（それらの財貨はそうあるにちががなく、そうでなければ、われわれも、それらの財貨を輸入しないであろうから）、明白なことではあるが、いかなるそのような財貨の消費も、われわれがそれらの財貨を自分たちで調達するために、一種の議会条例によってそれらの財貨を閉め出すことができるであろう場合に、それらの財貨がひき起すこともあるであろうほどにまで、ある多大の出費をひき起すことはありえないからである。」

「それゆえに、ここからしてもはつきりするにちがいないことではあるが、われわれが、何らかの外国品類を、われわれがそれらの財貨を輸入すると同様に低廉に調達するために、おそらくわれわれにできるすべての方策をつくしてしまつて、しかもわれわれではそれを行うことができないことを知る後で、そのような財貨を、われわれがそれらの財貨を自分たちで調達することができるよりも諸低率で使用するこのために、誰もがヨリ貧乏になるであろうことはありえないのである。いや、まさしくこのような事情こそ、そのような財貨をすべて何かそのような財貨をわれわれが行うことができるよりも低廉に調達することが可能である国々の諸特産物という銘柄の下に、舶来させるのである、なぜなら、それらの財貨は、そのような特産物として、必らず作用するであろうから。」

* 九七、九九頁

同じ作者は、自分の労作のもう一つの部分では、エラスムス・フィリップス (Erasmus Philips) から、彼が「つ、の、輝、や、か、し、き、準、則」と呼んでいる一準則を引用している。すなわち、「一種の交易国民は、一つの開け放たれた倉庫であるであらう、というのも、その倉庫においては、商人は、自分の好きなものを買ってもよいし、また自分にできるものを売ってもよいからである。どのようなものが諸君にもたらされるにしても、もし諸君がそれが欲しくなければ、諸君はそれを買いはしないであらう。もし諸君がそれが実際に欲しいなら、賦課金の大きさも、それを、諸君から隠し通せるものではない」と。

「それゆえに、世界のすべての国民は」とヴァンダーリントは言う「自分たちの多様な生業を、相互的な利得と相互の利益のために行使する商人たちの一団と、みなされるべきである*。「わたくしは争うつもりはない」と彼は、明白に、国民的な諸偏見に應じて、付言してもいる「わたくしは、一つの自由で抑制のない貿易のためには、フランスにかんしても争うつもりはない、たとえわたくしが、その場合においてさえ、そのフランスがわれわれに何らかの危害を加えることができるであらうことを、見抜くことができないにしても」*」と。

* 四二頁

** 四五頁

右の最後の文節では、スミス氏が、一種の分業と労働の分配の、同一共同体の構成員間に及ぼす有益な諸好果を、証明していただきたいとおけると同じ原理に基づいた一つの論証が、全地球にわたっての一つの自由通商のために、示唆されている。全人類の幸福は、事実上、前者の整合性によって、一特定国民のもつ慰安品が後者によって増加されるさいの仕方に全く類似する一つの仕方*で、促進されてゆくであらう。

同じ『議論』のうちに、ヴァンダーリント氏は、ロックの諸足跡を踏襲しながら、すべての租税は、究極的には、土地にかかる、だから、近代ヨーロッパの為政者たちによっていたるところで採択されているところの、つまり、為政者たちが国民を貧乏にし抑圧しているのに、主権者を、同じ程度に、富ませることもないところの、錯雑した財政的諸規制の代りに、一種の地租の代用を、推奨しているエコノミストたちの特に注目される理説を、かなりの創意をこめながら主張している*。

* ロウダーデール卿 (Lord Lauderdale) は、経済体制のもつ諸特有性と普通考えられている幾つかのヒントを、今ではほとんど忘れられた多彩なブリテンの公刊書のうちに、跡づけている。一六九六年にアスギル氏 (Mr. Asgill) によって公刊

された一『論説』(Treatise)からの次の抜粋は、ケネー哲学の眞の精神を、ただよわせている。

「われわれが諸商品と呼んでいるものは、地味から切り離された土地以外の何ものでもない。人は土以外の何ものもあきないはしない。商人たちというものは、土の一部を他の一部と交換するための、世の土地差配人たちなのである。国王自身も、雄牛の労働に、衣食している。そして陸軍の衣服も海軍の糧食も、すべて、窮極の管財人としての地味の保管者に、支払らわれるにちがいない。世の中の物財はすべて、本来の意味で、土壌の産物なのであって、すべての物財は、そこから調達されるにちがいない」——『公共の富の本質と起源にかんする研究』(Inquiry into the Nature and Origin of Public Wealth) 一一三頁

アスギル氏の論説の表題は、『金以外の一種の貨幣を創造するために論証された数個の言説』(Several Assertions proved, in order to create another Species of Money than Gold)となっている。その論説の目的は、一種の土地銀行のためのチェムバーレーン博士(Dr. Chamberlayne)の提案を、支持することにあるのであって、その論説を、同氏は、一六九三年におけるイギリス下院ならびに一七〇三年におけるスコットランド議會に、上程した。

この有名な党派をもっと際立って顯著なものにしている学説は、交易の自由にかんする理説でもなく、また地租にかんする理説でもなく、(これらの双方の論題にかんしては、この学派も、部分的には、イングランドの著作者たちによって予想されていたのであった)この学派が、現存の諸規制策や諸抑制策の傾向にかんして、諸都市の産業を田園の産業よりも優先的に奨励するために、実に創意をこめ力を尽して勧説していること、である。衰えゆくフランス農業を復活することが、この学派の諸思索の第一義の主導的な狙いであった。だから、この学派の多彩な論議のすべてが、この得意とする対象にかんして体系的に結実するはずであるように結合されるにあたつての純学理的な鋭敏さと精緻さに感嘆せずにいることは不可能なことである。フランスの経世家たちの注意力を、古い君主政体の下で、この必要不可欠な国民産業の部門の奨励にさし向けてゆくにさいしての、この学派の鐵骨の感化力というものは、スミス氏によつても、三〇年以上も前に、注目されていた。なお、その感化力は、かの国の統治が以来表示してきているまったく暴圧的で氣紛れな変容の下にあつても、同じ方向に働くことを、全然止めてはいないのである*。

* エコノミストたちのために付言しておくことは妥当なことにはかならないのではあるが、エコノミストたちは、彼らと一国民の知的道徳的性格との関連性において考察した政治經濟学の諸原理の上に、他のどのような著作者たちよりも、力点を置いた法学博士アダム・スミスの生涯と諸著作についての説話(三)(武田)

ていたのである。

商業的諸特権にかんする政策と論争するさいには、そしていろいろな国民の間における一つの自由交易のもつ互恵的な諸利益を断言するにさいしても、エコノミカル学派の創設者たちは、最初から、彼らのかかげる一義的な諸光明がイングランドから借用されていたことを、率直に認めていた。この点にかんするチュルギー氏の証言は、実に全く決定的なものであるから、わたくしは、(われわれと大陸との交通の遮断された現状における) わたくしの読者たちのうちには、最近にいたるまで、フランスにおいてさえほとんど全く知られるにいたらなかった一回想からの次の引用文に満足される者のあることを、希望している。この引用文は、その『回想』の作者の『ヴァンサン・ド・グルネにかんする頌辞』(Eloge on M. Vincent de Gournay) から転載されているのであって、その氏名は、この立法分野にかんする今では広く流布している諸見解の起源および進歩を跡づけようとしてきたフランスの著作家たちによっても、ケネー氏の名といつも一つに結び合わされているものなのである*。

* 『チュルギー全集』(Oeuvres de M. Turgot) 第三卷、パリ、一八〇八年

「ジャン・クロード・マリ―ヴァンサン・ド・グル―ネ―閣下 (Jean-Claude-Marie Vincent, Seigneur De Gournay, &c.) は、昨年(一七五九年)の六月二七日に、パリで亡くなったが、四七才であった。

彼は、一七一二年の五月に、サン・マロで、クロード・ヴァンサン (Claude Vincent) を父として生れたのであって、父は、この町の最も重要な貿易商の一人で、また国王の秘書官でもあった。

彼の両親は、彼に貿易をさせるつもりであった、だから、一七才になるや否や、一七二九年に、彼を、カディスに遣った*。

* 三二一頁

「ド・グル―ネ氏は、彼が、その特有の経験とその諸省察とから引き出したもろもろの理性の光に、ヨーロッパのいろいろな国民がこの主題にかんして所有していた比較的すぐれた諸著作についての説書による知識を、結び合わせていた、とりわけ、この種の国民すべてのうちでも一般的に最も富んでいて、しかもそれについては、この理由からしても、その言語を親しみやすいものにしていたイギリス国民というものを、結び合わせていたのである。彼が最も多くの喜びをもって読み、しかもそれによつ

て、彼がのそ学説を一番尊重するにいたった著作は、彼が以来フランス語に翻訳したこともある有名なジョサイア・チャイルドの諸論説と宰相ジャン・ド・ウイット (Grand Pensionnaire Jean de Witt) の回想録とであった。人々の話では、これらの二人の偉大な人間も、一人はイングランドのための、他の一人はオランダのための、商業にかんする立法家のように考えられているとのことであるし、彼らの諸原理は国民的な諸原理になっているとのことであり、またこれらの原理を遵守することは、これら両国民が、他のすべての強国に対して、通商上獲得している驚くべき優越性にかんする諸源泉のうちの一つのようにもみなされているとのことである。ド・グルーネ氏は、広く行きわたった通商上の慣行のうちに、これらの単純で明快な原理にかんする検証を、絶えず見出していたし、彼は、彼がその光をいつかはフランスにも普及させる運命にあったことを、だから、彼の祖国のために、イングランドとオランダがそれらの国民とその人間愛とにかんしてこの二人の恩人を追憶しては表明したと同様の認識にかかわる義務感というものを当然に受入れるべきであることを、何の予想もしないで、適切なこととしていたのである。」

* 三二四、三二五頁

「ド・グルーネ氏は、スペインを立去ってしまつてから、ヨーロッパ各地の周遊に何年かをついやす決心をしたが、それは、自分の知識を殖やすためでもあつたし、また自分の交信の範囲を拡めて、彼自らがつづけたいと思つていた通商のための有益な交友関係を、形成するためでもあつた。彼はハムブルグに旅行した。彼はオランダやイングランドを遍歴した。そして至る所で彼は、商業や海運の状態にかんする、またこれらの大きな目的に関係のある異なるこれらの国民によって採択されている行政上の諸主義にかんする、観察を行なつて覚書をまとめた。彼は、その旅行の間、ド・モールバ氏 (M. de Maupais) とは、絶えず文通を交わしつづけていて、同氏には、彼が収集したもろもろの真相を、報せてやつた。*

* 三二五、三二六頁

「ド・グルーネ氏は、一七四九年に、大評議會において、辛うじて評議員の職席を得た、そして一七五一年の始めに、通商監督官の一つの職席が空いてしまつたから、ド・マシヨール氏 (M. de Machault) は、ド・グルーネ氏の眞面を熟知していたので、彼グルーネ氏に、その席を提供した。この瞬間から、ド・グルーネ氏の生活は、公人のそれに変つたのであるが、彼の通商局入りは、革命の時期でもあるようにおもわれた。ド・グルーネ氏は、ヨリ広範におよぶ、ヨリ多様な通商上の二〇年の経験から、

オランダとイングランドのヨリ円熟した貿易商人たちとの交友関係から、この両国民のうちのヨリ尊敬するに足る作家たちの書物から、またそれらの国民の驚嘆すべき繁栄の諸原因についての注目すべき観察からして、通商局を構成していた行政官たちの誰にでも、斬新にみえる行動の指針を、供与していた*。

* 三二七、三二八頁

「ド・グルーネ氏は、彼が反対していた幾つかの悪弊が、ヨーロッパの大部分においては、かつては明瞭なものであったことを、しかも、それらが、イングランドにおいても、やはり諸痕跡をさへ残していることを、知らないわけではなかった。しかし、彼は、イングランド政府がそれらについて一部を打破していたことも、また知っていた。すなわち、それらの悪弊がなほ何ほどか残っているなら、それらを有用な制度として採択するどころではなく、イングランド政府は、それらを制限し、それらが拡大するのを妨止するように努めたことも、また国民にヨリ有利な権力の行使のさいでも、つねに不信を招きかねない当局の手によってしか修正されえないときには、共和政体がある種の悪弊を改革しようとしても、場合によっては、何ほどの障害に遭遇することのあることも、なお大目にみるしかないことを、知っていた。要するに、彼は、一世紀も前から、経験を積み重ねたすべての人々が、オランダにしろ、イングランドにしろ、この悪弊を、ゴート人の野蛮の遺物のようにみなしてきたことを、また公的な自由の重要さを知らず、その公的な自由を独占者の精神や特定の利益の侵害から擁護することも知らなかったすべての政府のもっている弱点の残滓とみなしてきたことを、知っていた*。

* これらの自由主義的な諸原理のうちの幾つかは、それらの道を、一七世紀の末葉以前には、フランスのうちに見出していた。——『現在の治政下におけるフランスの行政組織』(*Le D tail de la France sous le R gime Pr sent*)という表題をもったきわめて好奇心をそそる一書を、参照されたい。初版は(わたくしめけっしてお目にかかったことがないのであるが)、一六九八年または一六九九年に、世に出た。二版は、一七〇七年に、印刷された。両版とも匿名である、だが、その作者がド・ボワギューベール氏(Mr. de Bois-Guilbert)であったことは好く知られている、なおボルテールは、マレシャル・ド・ボーバン(the Mar chal de Vauban)の名で公けにされた『国王の十番目の計画』(*the Projet d'une dixi me Royale*)で、またド・ボワギューベール氏によるものと(誤って)した。——一七六九年発行『市民の暦表』第九卷、一二、一三頁を参照されたい。一老商人(ル・ザンドル La Gendre)がボルテール(Corbet)とのある談話のさいに使用したと言われている自由放任

(*laissez nous faire*) という運命的な表現、ならびにマルキ・ダルジャンソン (the Marguis d'Argenson) のなお一層意味深長な訓言である政府無用 (*pas trop gouverner*) は、それらが今では獲得してしまっているその俚諺の名声を、もっと近代の諸論議によって、それらにかんし省察を加えられるにいたった偶発的な光彩から、得ているのである。同時に、それらは、バーク氏 (Mr. Burke) が、あるところで、「立法上における最もすばらしいものの一つ、すなわち、国家は、公衆の知恵によつて管理するためには、国家自体の上に何を採り上げるべきであるか、また干渉をできるだけ少なくするために、個人の思惑に何を取り残しておくべきであるかを確証することである、」と公言していたある問題のもつ重要さについての一つの明晰な知覚力をそれらの創作者たちのうちにも明示していることを、容認しているにちがいない。この難問の解決も、この難問のもつ最も興味ふかい諸事例のうちの幾つかにおいては、スミス氏の『研究』の主要な諸目的の一つとみなされてよいであらう。だからこそ、この労作が広く行きわたっている諸見解のうちに徐々に生みだしてきた幾多の幸運な変化のあいだにあって、大衆が政治的経験にかんする用意周到な総明さにもかかわらず実に誤りを犯しやすい姑息な規正にかかわる経験的精神を信用していないことにおいて、この労作のもつ力強い効果ほどに、大きな帰結をもつものは、おそらく何一つないのである。

「ド・グルーネ氏は、二〇年の間、きわめて重要視してきたこれらすべての法の存在を、書物によつてしか学ぶ機会をもたないで、最も大規模な世界的通商を行ってきたし、またそうみなされてもいた、そして彼は、経験が教える諸原理を發展させるだけであつたときには、また彼が彼の出会つた最も開明的な商人たちによつて一般に知られていたときには、彼が改革者や主義の人であると考えられたとは、けつして信じていなかった。

これらの原理は、新主義の名称をもつてはいたが、彼にはヨリ單純な良識の準則にしかみえなかつた。このいわゆる主義なるものはすべて、一般にいかなる人も、その人特有の利害關係を、この利害關係に全然無関心である他の人よりも、よりよく知っているものであるという準則に、基づいている。^{*}

* わたくしは、以前のある労作において、まさしくこれと同じ原理にかんし、スミス氏の政治上の諸思索のうちの幾つかが、実際の経験に基づくよりもむしろ理論に基づいているのであるという責を負うものではないことを立証するように努めておいた。わたくしは、ごく最近にいたるまで、この問題にかんしてのこのような見方が、ド・グルーネ氏やチュルゴー氏のような高邁な権威によつても承認されていたことを、承知していなかった。——『人間の精神にかんする哲学』 (*Philosophy of the*

Human Mind 二五四—二五六頁、第三版(第四章八節、前掲全集、第二卷、二三五頁末尾) 参照のこと

「その点からして、ド・グルーネ氏は、特定の人々の利害関係が一般の人々の利害関係とまさしく同じであるときには、ヨリよく為されるところのことは、それぞれの人に、その望むところのことを自由にさせることである、と結論した。ところで、彼は彼自身にゆだねられた商業においては、特定人の利害関係が一般人の利害関係と一致しないことのないことを、見出した。*

* 三二四—三三六頁

ド・グルーネ氏の課税問題にかんする見解に言及するにさいしては、チュルゴー氏は、ド・グルーネ氏がその課税問題を引き出したさいにおける源泉には、どのような注目もしていない。しかしこの論点にかんしては(その見解の正当性にかんしてのよう)に考えられようとも)、ロックならびにヴァンダーリントの諸著作に通曉している人たちの間では、いかなる疑惑もありえないのである。

「彼は考えていた」とチュルゴーは言う、「すべての租税は、最近の分析によれば、土地の生産物をそれだけヨリ安く売る地主によって、常に支払われているということ、またすべての租税が資産の上にまで拡げられるなら、富や通商の拡大の結果生じた価値の驚くべき増大を勘定に入れなくても、地主と王国は、あるいは租税徴収のためであれ、また密売買のためであれ、あるいはその防止のためであれ、損失をうけた人々の乏しい消費分または使用分や徴税費を吸収するところのものをすべて、得ることになるということ」*。

* 三五〇、三五一頁

編纂者によるこの章節にかんしてのある覚書では、一つの地租税についてのこの目論見は、一つの自由交易の目論見とともに、グルーネとケネーが共に完全に投合したさいの最も重要な諸要点のうちでも言及されている。*しかしして少なからず好奇心をそるることではあるが、ほとんど二〇年前に公けにされたヴァンダーリントの論説において、その同じ二つの理説が、同じ主義についての諸部分として、一つに結び合わされていたであらうということである。*

* これは、通商ならびに労働の自由にかんするかぎり、ド・グルーネ氏とケネー氏とが完全に意見の一致をみた主要点の一つ

である。

** わたくしは、すでに、ヴァンダーリントから、交易の自由についての彼の見解を、引用しておいた。課税にかんしての彼の思想を、わたくしは、また、彼自身の言葉で述べることにしよう。すなわち——「わたくしは、もしもすべての租税が財貨から取除かれて、土地と家屋にだけ課せられるとするなら、ジェントマンたちは、彼らの地所から取残された純地代を、租税がほとんど全部財貨に課せられる今こそ彼らが所持する以上に所持するであろうことを、表示せずこの論点を打切ってしまうことはできない」と。この前提の証明にさいしての彼の論証のためには、同氏の『貨幣論(Essay on Money)』一〇九頁およびそれ以下を参照されたい。また、一六九一年に公刊されたロックの『貨幣の利子を引下げてこの価値を引上げることにかんする諸考察』(Considerations on the Lowering of Interest and Raising the Value of Money)も、参照されたい。

「耕作上の総生産」と「純生産」との間の、はつきりした区別の、(いわゆる)発見にかんしては、その作者について論争することは、価値のないことである。この課税理論がどのような功績をもつであらうにしても、その理論にかんする全信用は、前のパラグラフで述べた課税を最初に提起してくれた人たちのものである。ケネー氏の計算は、領土のうちの実に広大な一部が折半小作農または小作人によって耕作されていた一つの国において、それがいかに興味ふかつかつ有益に見えていようと、政治経済学の一般的諸原理に何か新しい光を投じてくれるもののようにには確かに考察されえないのである。

+ 一七六九年版『市民の暦表』第一巻。一三、二五および二六頁、ならびに第九巻、九頁を参照のこと

ド・グルーネ氏の独創的な諸労作のうちの何かがこれまでに公けにされたということは、チュルゴーの同氏にかんする説話からしても明らかでないし、またわたくしも、同氏が、一七五二年以前に、翻訳者の力量というものにおいてさえ知られていたということを、聞いたことがない。同氏は「幸運であった」とチュルゴー氏は言う「トリュデーン氏(Mr. Trudaine)のうちに、たまたま同氏を元気づける真理と公益にたいする同じ愛情を見出して。同氏は、その原理を、為すべき事についての議論の折とか談話の折になお発展させることをしなかつたので、トリュデーン氏は、その理説に一種の形を与えることを、同氏にすすめしたのである。だから、このような見地からして、同氏は、一七五二年に、ジョサイア・チャイルド(Josias Child)とトマス・カルペッパー(Thomas Culpesper)の通商ならびに貨幣利子にかんする論説を、翻訳したのである。わたくしはこの章節を引用する。なぜなら、そのことによればこそ、わたくしも、年代の点におけるある不正確さを正すことができるからであるが、

この年代は、チュルゴー全集についてこれまでに世に出た最初の決定版を、そのお蔭でわれわれが得ている学識豊かで創意あふれる著作者の記憶のうちにさえ、残っていないのである。エコノミストたちを、二つの学派であるグルーネ学派とケネー学派に分けた後、その著作者は、前者の名称の下に、(他の幾人かのきわめて著名な人名とともに)デビット・ヒューム氏も分類しているが、わたくしが勝手に言及することを許していただかねばならないヒューム氏の『政治論集』(Political Discourses)は、はやくも一七五二年には公けにされていたのであって、その年次は、ド・グルーネ氏がチャイルドならびにカルペッパーにかんする同氏の『翻訳集』を公刊したまさにその年でもあった。

* 三五四頁

同じ著作者は、後で、次のようにも付言している。すなわち——「一方にとつてもまた他方にとつても有益であるが、しかしどちらにもかかり合うように見えるのを注意ぶかく避けているこれらの二つの学派の間にあつても、幾人かの折衷主義的な哲学者があらわれているが、その頂点には、チュルゴー氏、コンジャック神父(L'abbé de Candillac)およびかの有名なアダム・スミス氏を置かなければならない。なお、はなはだ名譽なことながら、それらの人士のうちに、スミスの翻訳者である上院議員ジュールマン・ガルニエ氏(M. le Sénateur Germain Garnier)、イングランドではわがランズダウン卿(Lord Lansdowne)、パリではセー氏(M. Say)、ジュネーヴではシモンド氏(M. Simonde)をも、数えあげなければならぬ。

スミス氏が、エコノミストたちの諸著作を、彼の『諸国民の富』において、どれほどまで利用していたかは、わたくしの当面検討すべき事柄ではない。わたくしが確証したのは、グルーネとかケネーとかの名前が少しでも学界で聞かれる幾年か以前に、彼が彼らエコノミストたちと共通して公言していた同一の諸見解にたいしても、争うべからざるその当然の権利をもつ、ということにつぎるのである。

グルーネならびにケネーの折衷的な、門弟たちの間にあつても、ここではスミス氏の線にそつて数えあげられるきわめて優秀で開明的なイギリスの為政者にかんしては、わたくしは、その為政者自身の權威からして、最初にその為政者をこのような思考連鎖に導くにいたつた偶発的な事情を、明確に述べることが出来る。わたくしが一七九五年に閣下から受領する栄を得た一書簡において、同閣下は次のように述べられている。すなわち——

「わたくしは、スミス氏とともに、エディンバラからロンドンまで旅行をしましたお蔭で、わたくしの生涯のうちの最良の頃を

いての彼の最初の課程に出席した学生たちの追憶、つまり四〇年も遠く隔たってしまったてはきわめて確実なものであるとは想定することもおぼつかない一つの追憶に、全く根ざしているのであるから、完全な意味で決定的なものではない、と反論されるかもしれないことは、わたくしも承知している。けれども、幸運なことには、スミス氏によって一七五五年に起草されて、しかも彼がその当時その会員になっていたある協会に宛てて彼によって提出された簡潔な一手稿が、現存しているのである。その論文のうちには、政治上ならびに学芸上の双方にわたる一定の指導的な諸原理について、かなり長文の一覧表が掲載されているのであって、その指導的な諸原理のためには、彼は、彼がその解釈すべき理由もあると考いた幾人かの論敵の諸主張のもつ可能性を阻止するために、専ら自己の権利を確証したものと切望していたし、またそれらの原理のためには、個人的な関係の諸会社にも彼の隔意のない交信を寄せていた彼の教授としての地位が、彼に、格別に責任を感じさせてもいた。この論文は、今は、わたくしが所蔵している。それは、自分の気質の卒直さについても、いろいろな便宜がはかられているのではないかと思うときには、自己自身の抱くもろもろの意図の純粹さを意識している一個の人間によつては、おそらく避けることのできない正明で憤懣にたえない大変な熱情をもって、述べられている。そのような折には、その結果においてはいかに苛酷であるにしても、その罪に値する人たちにはかならずしも背信を意味するとはかぎらない諸剽窃にたいしても、妥当な諸斟酌が常になされるものではない。なぜなら、自分自身では独創的思想をもつことの不可能な人類の大部分は、得意とする一つの思索を蚕食することによつても、創意あふれる一個の天才に加えられた危害の本質というものについて、全く何一つ考いをまとめることができないからである。本学会の幾人かの会員には知られている諸理由のために、この手稿を公刊することによつて、個人的な見解の相異を憶い起させるということは、妥当なことではないであろう。そし

てわたくしも、もしわたくしが、その手稿がスミス氏のあるきわめて早期の政治思想の進歩についての一つの貴重な記録と、思わなかったならば、それに言及することさえしなかったであろう。『諸国民の富』における最も重要な諸見解のうちの多くは、そこに、詳述されている。しかし、わたくしは、次の文節だけを、引用することにしよう。すなわち——「人間は、政治家たちや事業企画者たちによれば、一般に、一種の政治工学の諸材料とみなされている。事業企画者たちは、自然を、人事におけるその運用の過程において、攪乱する。だから、自然が自然自体の諸企画を確証するためには、その政治工学は、自然を孤独にさせておいて、自然のプエア・プレイを、自然の諸目的を追求するさえに賦与するように、要求するにほかならないのである。」——また他の章節では、すなわち——「一つの国家を最低の野蛮状態から最高度の富裕にもたすためには、平和、容易な諸租税および一種の寛容な正義にかかわる行政以外には、他にほとんど何も必要としない。というのも、残余のものは、すべて、物事の自然的運行によつてもたらされるからである。この自然的行程を妨げるところの、物事を強制的に他の経路に向かわせるところの、あるいは、社会の進歩を特定の一点に拘引するように努めるところの統治はすべて、不自然であり、だからそれら自体を支持することは、抑圧的かつ専制的とならざるをえないのである。……この論文に列挙した大部分の見方は」と彼は述べている「わたくしがなお手許に保管している、六年前にわたくしのために尽してくれたある書記の手で書かれた幾つかの講義案のうちに詳細に論じられている。それらの見解は、そのすべてが、わたくしがクレイギー氏のクラスを最初に教えた、わたくしがグラスゴウで過した最初の冬以来今日にいたるまで、絶えずわたくしの講義の主題になっているのである。それらの見解は、そのすべてが、わたくしがエディンバラを去る前の冬に、そのエディンバラで講読した講義の主題をなしていたのもあった、だから、わたくしは、それらの見解がわたくしのものであることを十分に

確証してくれるであろう数限りない証人を、その土地とこの土地との双方から挙げることもできるのである。」

結局、スミス氏の労作のような一つの労作の真価は、それが内容にもつ諸原理というものの斬新さからでは、これらの原理を支持するのに使用された諸推論からよりも、またこれらの原理がその個有な秩序と関連において展開されるにさいしての科学的方法からよりも、評価されないはずである。一つの自由通商のもつ諸有利性にかんしての一般的諸主張は、早期のある年代の多彩な著作者たちからでも収集することができよう。しかし、政治経済学で起るような錯雑した一つの本質にかかわる諸疑問においては、そのような諸見解にかんする信憑性は、それらの見解の堅実性を最初に立証し、しかもそれらの見解を、それらの見解に關係の薄い諸帰結から踏襲してもきた作者に帰属するのであつて、ある幸運な偶然によつて、真理というものに最初に遭遇するような作者に帰属するものではない。

スミス氏がとりわけ彼自身のものとして考察していた諸原理の外になお、彼の『研究』は、政治経済上の最も重要な諸項目にかんする一つの体系的な見方を、そのきわめて広範にわたる難解な学問にかんする一つの基本的な論説の目標にもかなうように、提示している。彼の整合のさいに表示された精神の熟達ぶりと包擁性とは、その整合性を、彼の直接の先覚者たちによつて採択されていた整合性と比較してみたことのある人たちだけによつて判定されうるものである。しかして、効用性の点でも、おそらく彼が四散したそれらの思想を関連させることと方法化することですでた労苦は、彼自身の独創的な諸思索のもつ諸成果に劣らず貴重なものである。なぜなら、一つの明確で自然的な順序において体系的に整理されるときにのみ、もろもろの真理は、その個有な印象を、精神に刻みつけるからであり、また誤謬のある諸見解は、成功裡に論戦することができからである。

スミス氏の書物のもつ堅実で重要な諸理説を、例外的に見えるか疑がわしく見える諸見解から一つ分離を試みる

ことは(たとえわたくしがそのような一つの仕事をする資格があるにしても)、当面のわたくしの企図するところではない。わたくしは、彼の諸結論のうちには、暗黙のうちにも賛意を表しようとは解しかねるものもある、とりわけ、彼が課税の諸原理について論じる章のうちにあることを、認めるものである——。この章は、彼が、彼の批評の下に置かれた他の諸主題のうちの大部分よりも、確かに、杜撰で不満足な一つの方法で検討している一つの主題ではある。^①

① スミス氏が、自分の名前で容認をしていた疑わしい諸理説の間にあつても、彼が利率にかんする法的制限の便宜性にかんして主張していた見解ほどに多くの重要な帰結を含むものは、おそらく何一つ存在しない。この点にかんする彼の推論の不得要領は、一種独特な論理的鋭利さをもって、ベンサム氏(Mr. Bentham)により、『高利の一擁護』(A Defence of Usury)という表題をもった簡潔な一論説において、明示されている。この論説は、(その公刊の年代以来、長い中絶を経ているにもかかわらず)、わたくしが、何らかの解答がこれまでに試みられたことがあることを、知らないところの、しかも、商業上の諸運用にすばらしく通曉した今は亡きある著作者が「完全に解答不可能で」あることを(そしてわたくしの見解では、多大の真実をこめて)公言しているところの、一つの傑作である。^{*}一つの注目すべき事柄ではあるが、スミス氏は、唯一つこの事例においては、実につまらない諸根拠にもとづいて、彼の政治的諸論議の一般的精神とは実に顕著な対照をなす、しかも、他の折おりには、彼がその実際的な応用を通じて実に大胆にやり遂げていた基本的諸原理とも実に明白に一致しない、一つの結論を採択しているのである。このことは、フランス・エコノミストたちが、二、三年前に、自由通商の理説のこのような拡大に反対してややもすると自らを露呈する最もまことしやかな諸反論を除去してしまつていたのであつたからして、それだけ一層驚くべきことなのである。特に、チュルゴー氏の『富の形成と分配にかんする諸省察』(Reflections on the Formation and Distribution of Riches)における幾つかの觀察、ならびに、同じ作者による『利子の貸付と鉄の取引とにかんする賞書』(Memoire sur le Pret à Interet, et sur le Commerce des Fers)という表題をもった別個の試論を、^{**}参照されたい。

* フランシス・ペーリング卿(Sir Francis Baring)の『インシュランド銀行にかんして』(On the Bank of England)の小冊子

法学博士アダム・スミスの生涯と諸著作についての説話(武田)

**『諸国民の富』の公刊の幾年か前に、グラスゴウのある学芸協會で講読した一試論において、ライド博士(Dr. Reid)は、利子率にかんする法的諸制限の便宜性を、論駁し、自己の見解を、それ以後ベンサム氏によって実に力強く論述されるにいたったと同一の諸考察のうちの幾つかに見出してゐた。同博士の注意力は、ジェムズ・スチュアート卿(Sir James Stewart)の『政治経済学』(Political Economy)におけるこれらの諸制限のきわめて脆弱な擁護のために、多分、ひきつけられるにいたつたものであったが、この著作は、その当時は、近次に公刊されてゐたのであつて、しかも(同博士はその諸理説の多くとは大いに異なつてゐたけれど、自分のアカデミカルな講義では)、自分の学生たちに熱心に推奨してゐた一書ではあつた。それは、実際には、スミス氏の『研究』の以前にわれわれの言葉で世に出たところの、経済問題にかんする唯一の体系的労作であつた。

けれども、前の覺書で言及しておいた諸疑問は勿論のこと、この特定の疑問においても、わたくしは、エコノミストたちの諸主張に先行するわれわれ自身の同国人の諸主張を揚言することを許されなければならない。有名なロー氏によつて、(同氏が台閣に昇る以前に)、摂政オルレアン公(the Regent Duke of Orleans)に献呈された一回想録からすると、このきわめて創意に富む著作者は、チュルゴー氏と同一の見解を、保持してゐたようである。そして、ロー氏がその見解を支持するさいに用いてゐる諸論証は、概して、彼の諸構文をきわだせてゐる明快さと簡潔さとをもつて、表明されてゐる。わたくしが参照するさいの回想録は、『一五九五年から一七二一年にいたるまでのフランスの財政にかんする研究ならびに考察』(Recherches et Considerations sur les Finances de France, depuis 1595 jusqu'en 1721)という表題をもつたフランス語の一勞作のうちに見出されるはずである。同じ巻書において、この理説は、その編集者により、その作者としては、あるいは少くとも、フランスにおける最初の首唱者としては、ロー氏であるとされてゐる。「ロー氏によつて最初にフランスに持ちこたされた一つの見解、それは、国家といふものは、利子率にかんしては、けつして規制をしてはならないということである。」**

* 一七五八年にリージュで印刷された版の第六卷一八一頁を参照されたい。

** 六四頁

この見解には、ローも、明らかに、ロックによつて導かれてゐたようであるが、そのロックの諸推論は、(彼自身は法定利子

率のために確言もしているのであるけれども、それらのすべてに、相反する結論を指示しているようにおもわれる。実際に、彼が現存の諸規制のために示唆している弁明は、大変に取るに足りないものであり、また大変に軽い気持ちで進められているので、人は、彼が既成の諸偏見にたいするある尊重の念のために、彼の論証を、そのもつ十全な範囲にまで押し進めることをただ阻止されたのだ、とほとんど想像するであろう。わたくしが言及している章節は、それが書かれた時期を考察するときには、ロックの聰明さにとっても少なからず名譽にはなる。

* 二折版ロック全集、第二巻、三一頁およびそれ以下を、参照されたい。

最も明白で重要な諸真理というものは免角非難をまぬがれない地域から生じると想定されているときに、もしわたくしがそれらの真理に対して実に多くの人の目を閉すところの脆弱ではあるが根深くもある偏見の好果を未然に除去することを切望しなかったとしたら、わたくしは、ここで、最後の二つの覚書に含まれた歴史的諸細目にまで立入ることをしなかったであろう。フランス・エコノミストたちが具体化して体系化した指導的諸見解は、実際は、すべてがブリテンに起源をもつものであった。だから、それらの見解の大部分は、(ロック卿 Lord Coke によれば)、イギリス法理学の諸第一原理と同一視されている自然法の一準則からして、必然的帰結として起ってくるのである。「全通商、完全自由の法則は、財産法からの一つの必然的帰結である。」経済学体系のうちの本当に例外的な部分は(わたくしも他のところで言及しているように)、主権者の権力に関係する部分である。経済学体系の独創的な作者たちや擁護者たちは、政治的自由の決定的な反対者たちであった、だから、財産権と通商の自由にたいする彼らの熱意では、前者か後者かが有効裡に保護されうるさいにおける唯一の手段をも、見失なっていた。

作者が終始一貫自己の諸見解を述べるにさいしての男らしい尊厳な自由というもの、および作者が、著作したさいの時代時代の諸党派に関連した些細なすべての情感にたいして、始終発見する優越感というものに注目することなしに、わたくしがこの節を結ぶとするなら、適切さを欠くであろう。作者の構文のもつ一般的抑揚をその最初の公刊の時期と比較してみる労を惜まない人なら誰でも、必ずやこの言説のもつ迫真力を感じてくれた認めてくれるにちが

いない。すなわち——しばしばあることではないが、私心のない一つの真理にたいする熱情は、その熱情のもつ正当な報酬に実にくすみやかに遭遇することもある。哲学者たちは、(ベーコン卿の表現を用いるなら)、「子孫の下僕」である、だから、自己の諸才幹を人類の最善の利益のために献げてきた人たちの大部分は、ベーコンのように、未だ生れ出ない人類のために、「自己の名声を伝え」、そして他の一つの世代が刈り取るはずであるものを播いておくというイデアをもって、自らを慰めざるをえないのである。すなわち

ダフニスのために梨の木を植えよ

汝の実りは孫たちが食べるであろう

スミス氏はもっと幸運であった、いやむしろ、この点では、彼の幸運は不思議なものであった。彼は、労作の公刊後わずか一五年しか、生き永らいなかった。しかもなお、その短かい期間中に、彼は、それが最初に惹き起した反論も、徐々に鎮静してゆくのを見届けるといふ満足感を味わったばかりでなく、彼の諸著作が彼の国の商業政策に實際影響を及ぼしてゆくを目撃するという満足感をも味わった。